
三人棒～難事件解決探偵事務所～ season 1

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人棒〜難事件解決探偵事務所〜season1

【Nコード】

N4378P

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

相棒シリーズのスピノフ二次創作が始動する。台風X号オールスターズ作品にして最大の台風projectが開幕！

第一話 難事件探偵事務所始動！県議会議員の脱税から始まったストーリー

此の時が来た。福井県に突如相棒のような組織が生まれる。

第一話 難事件探偵事務所始動！県議会議員の脱税から始まったストーリー p.2

福井県県議会議員議員長と議員の一人は、あることを話していた。

「俺達の脱税は、ばらされたらまずいからな。」

「福井県議員の信頼度が落ちてしまいますからね。」

この脱税の事件は、白日の下にさらされることを二人は知らない。

福井県坂井市丸岡町の場所に難事件探偵事務所になる場所が生まれた。

警察の捜査では簡単にはいかない事件と国税局査察官がかかりたくない脱税事件を彼等が立ち向かう。

亜羽地あひぢ眺彦のりひこ、吉米よしみ滝広たきひろ、山風やまかぜ正晃まさてる、上間うへま三津屋みつや、虹山にじやま朱子あけこ、海浦うみうら遠とほ木おきの六人が三人に分かれて行動を行う。

簡単にはいかない事件を取り扱っている。

「亜羽地さん、福井県議員の一人に脱税の疑いつて金日からメールで届いています。」

「金日って六季の奴じゃねえのか？」

六季と言うのは、いろんな犯罪を犯しているといわれる犯罪組織だが、なぜ金日からこれが届いたのかは不明である。

福井県議会は、議員長と議員が脱税をしていることを知らないでいた。

国税局査察官の人たちは、動けない。

相手が県であるのが国であるのが無闇に襲うことはできない。

亜羽地と吉米と山風は、気になることがあった。

「吉米君、議員長も怪しいと思っっていますか？」

「もしかしたらっていうこともありますからね。」

「そうではなかったら、吉米の推測妄想確定だぜ！」

第一話 難事件探偵事務所始動！県議会議員の脱税から始まったストーリー part 1

次回は、 part 2をお楽しみに・・・

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 2 (前書き)

5本なので後三本で次に行きます。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 2

「妄想推理だと！」

「山風君、そろそろ着きますよ。」

福井県庁

車を止めた亜羽地は、二人と一緒に福井県議会の方へと向かった。

福井県議会の一人、刻村静冠「くむらひでかん」という人物である。

議長を務めているが、周りから冷たい目を向けられている。

もう一人の議員は、蝉井駿佳「せみいしゅんかい」と言う人物。

議長と何やらつるんでいる噂があるらしい。

「あの、誰ですか？」

「難事件解決探偵事務所の亜羽地と申します。」「同じく吉米です。」

「同じく山風です。」

「探偵がなんのようだい？」

蝉井は、少しだけ驚いたた表情で言った。

すると、亜羽地が早速、こんなことを言った。

「実は、ある情報誌を呼んでいまして、福井県議会議長と議員がつるんで脱税をしているということを聞き、もしかしたらという感じになり来ました。」

刻村は、笑いながら言った。

「それでは、我々はそんなバカなことなんてしてませんよ。大体、マスコミの書くことを真実にするなんて馬鹿げています。」

「実を言うとマスコミの情報が間違いなのではないかと考えて、我々が来ました。もし間違いなら、マスコミは、情報ねつ造の疑いになります。」

「間違いだと思います。」

難事件解決探偵事務所に戻った、探偵たちは、あることを確認していた。

「やはり、これだけ脱税しています。」

吉米は、其れを見て驚いた。

「80億円の脱税、しかもあの二人が……」

山風は、もう一つ最悪なことが分かった。

「未納時期は、2年前からですよ。」

「刻村議長が就任したのも2年前です。」

「これは、不思議にもほどがあると言いたいです。」

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 2（後書き）

次回は、 part 3です。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 3（前書き）

虹山が聞き込み調査の結果、亜羽地の推理のパズルを完成させる。
短めです。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 3

「亜羽地さん、面白い情報を見つけましたよ。」

虹山が突然、亜羽地さんにある情報を伝えた。

「近所の噂らしいんですが、蝉井議員の周りには、変な軍団がいる。というらしいです。暴力団じゃなければいいけどな。」

亜羽地は、推理のパズルを一気に完成させた。

「なるほど、議員と議長だけでなく、妙な組織がいることがいることを。あと一つのピースをやっと埋めることもできました。」

亜羽地は、吉米と山風を呼び出して、福井県あわら市牛ノ谷に向かった。

牛ノ谷には、刻村議長の家があった。

山風は、刻村の家のチャイムを鳴らした。

「はい、誰ですか？つてまた探偵さんたちですか。」

「刻村さん、立派な家を持っていますね。」

亜羽地は、優しそうに言った。

「自分のお財布で買ったものです。チラシで見ていい家だと思ったので。」

吉米は、突然、台所に向かった。

「そこには何も無い！」

刻村は、唐突に答えを言ってしまった。

台所のカーペットを捲ると80億円のお金が埋まっていた。

山風は、刻村に言った。

「これでもう、言い逃れできませんね。刻村議長。」

「この家を買った時、自分の財布がゼロになり、それを隠してまで議長に上り詰めた。しかし、給料でも満足に活動ができなかった。蝉井と親友になってしまったことが原因で、脱税に走ってしまいました。」

亜羽地は、蝉井を探すことにした。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 3 (後書き)

次回 part 4です。楽しみに。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 4 (前書き)

ついに事件が解決へ。短めです。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 4

亜羽地達は、蝉井がいるところへと移動した。

蝉井は、坂井市三国町池上に家を持っている。

蝉井は、三国競艇で休んでいた。

「本日は、競艇は選手のトレーニング用として貸し切り状態になっていますよ。」

亜羽地は、蝉井にそう言った。

「知ってますよ。そんなことぐらい。」

吉米と山風は、刻村の言ったことをすべて話した。

「裏切られた気分ですよ。しかし、俺は捕まりません。」

「脱税の疑いがあるのですが、その証拠がない。」

亜羽地はあることを言った。

「懐かしいです。20年前のことが。あの時は、自分が警察時代だった頃、脱税犯が二人いましたね。一人は、自首して、一人は、逮捕されているんですよ。このようなことって不思議ですね。」

「何か言いたいことがあるんですか？」

「警察が、蝉井さんの家で脱税の証拠をつかめているといひんです
が・・・」

警察は、蝉井の裏庭に二億五千万円を発見した。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 4（後書き）

次回 part5です。楽しみに！

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 5 (前書き)

ついに脱税事件が閉幕する。次回予告付なので楽しめますよ。

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 5

亜羽地の携帯電話に知り合いの警察官から電話がかかってきた。

「もしもし、亜羽地ですが。」

「亜羽地さんの言うとおり、裏庭にある可能性がというのを勘だよりにしたら、2億5千万円の脱税金を見つけました。蝉井は、どこにいるんですか？」

「三国競艇にいます。」

「分かりました。切ります。」

警察官の名前は、福乃沫亭ふくのまほゆき警部補である。

「どつやら、蝉井議員は、三国競艇にいる。探偵がそう言っていた。」

「探偵？まっいい、よし急いで三国競艇に向かうぞ。」

「はいっ！」

警察は、急いで三国競艇に向かった。

三国競艇では、蝉井が逃走していた。

「吉米君、上から攻めてください。山風君は、下で攻めてください。」

「了解!」「分かりました。」

蝉井は、三国競艇の観客席をつまく走っていたが、吉米と山風に取り押さえられた。

「おとなしくしろ!」

「逃げる気があるのなら、脱税という愚かな行為をしなければ良かったのです。」

亜羽地が怒りながら言った。

蝉井は、そのあと警察に連行された。

亜羽地と吉米と山風は、探偵事務所に戻った。

「難事件探偵事務所?」

山風が看板を見ていた。

虹山と海浦は、何も言わなかったが、上間が言った。

「さっき、警察の人がこういう名前にしたらどうだって言ってたんだ。」

「悪くない名前ですね。」

吉米は、冷蔵庫からあるコーヒーを取り出した。

「まさか、噂の激苦コーヒーだろ！」

山風が言った。

「ああ、そうだけど。21世紀最強のコーヒーとか言われている。」

吉米は、コーヒーを飲んでいた。

「苦いのに、こんなにおいしいなんてすごい作り方をしているに違いないな。」

上間が、飲んでみた。

「こいつ苦いつ！」

上間は、驚いていた。

次回予告

「激苦コーヒーで有名のお店のオーナーが殺された。」

「どうやら、揉めあった拳銃、腹部にナイフが刺さってしまったようですね。」

「亜羽地さん、あのコーヒーは、あまり売れていないんですが、僕と同じ考えで買う人が稲かもしれません。」

次回 三人棒 第二話 五年前の犯人。

「どうも、五年前に失踪した。人が犯人といなんて、僕には少し見

「間違いです。」

「でも、真実ですから。」

「山風君、今すぐにその人物を取り押さえてください。」

「分かりました。」

第一話 難事件解決探偵事務所始動！ part 5（後書き）

次回から、1話が、3つの物語に分かれた形式になります。次回もまた見てね。

第二話 五年前の犯人 part 1 (前書き)

最初は、5年前の犯人がオーナーに・・・

第二話 五年前の犯人 part 1

2005年8月に突然行方不明になった人物がいた。

福井県警も必死に搜索を開始したのだが、見つからなかった。

そのため、その人物の友人が失踪届を出した。

2010年7月26日

吉米は、いつものように、喫茶店に入ってきた。

「オーナー、いつものコーヒーをお持ち帰りで。あれっ、オーナー？」

オーナーを呼んでも、出てこないことに不信と思い、カウンターの裏側に回って見ていたら・・・

「うわあ、オーナー。」

45分後、福井県警捜査一課と難事件探偵事務所と鑑識がやってきた。

「第一発見者が、探偵の吉米さんだとは。」

福井県警察捜査一課の一人、一寸木大舩ちよつきたいる巡査部長

福井県警察捜査一課の一人、多比山たひやまよついつ洋逸巡査

福井県警察鑑識の一人、室矢千巡查部長むろやちたひ

「吉米君、とんでもない事件に遭遇しましたね。」

「亜羽地さん、そんな不謹慎ですよ。言われる立場にとっては。」

吉米は、激苦コーヒーの入っている冷蔵庫を見ていた。

「一本なくなっている。」

「激苦コーヒーは、21世紀最強のコーヒーと呼ばれている程、相当苦いコーヒーらしいですよ。」

亜羽地が？マークの付いている捜査一課の二人と鑑識に伝えた。

「前来た時は、26本でしたが、25本になっています。」

「オーナーが飲んだのでは？」

「一寸木さん、此処のオーナーは、自分で作ったコーヒーを飲まない主義ですよ。此処に足を踏み入れから、オーナーと親友のように話したらそう言ってたんですよ。」

「それは、失礼しました。」

まるで伊丹刑事のような口調でその場を去った一寸木。

「室矢さん。念のため、冷蔵庫の扉のドアノブの指紋も調査してください。」

「はい、分かりました。」

吉米は、自動販売機でブラックのコーヒーを買った。

「君は、結構苦いものが好きなんですね。」

「甘いコーヒーだと目が覚めないんですよ。」

「そうですか。オーナーの名前、千羽鶴雄亮せんはつるゆうすけという人らしいです。」

山風があわてて、亜羽地に駆け寄った。

「亜羽地さん、千羽鶴の死亡推定時刻が分かりました。」

「死亡推定時刻は何時ですか？」

「昨夜の3時過ぎでした。」

探偵事務所に戻った3人は、虹山がつかんだ情報を聞いていた。

「私も、犯人のことで気になって調べていたら、失踪届が宣告されている。石丸灌阿手いしまるたつあてという人物が5年前に失踪していました。しかも、鑑識の調べで、失踪者の持ち物を友人がハンカチで持っていたのを指紋だけ押収していて、冷蔵庫についていた指紋と一致しました。」

探偵事務所で亜羽地と上間は、将棋をしながら推理をしていた。

「どうも変ですね、五年前の失踪者が殺人を犯すとは。ただし五年間どうやって暮らしていたのでしょうか？」

「もしかしたら、偽名の疑いもありませんか？」

亜羽地は、歩兵を動かして体勢を立て直した。

「確か、石丸さんの友人にかまをかけてみますか。」

亜羽地は、にやけながら勝利の一手を上間に攻撃した。

「王手ですよ。」

「うわっ、また8連敗かよ！」

「吉米君、海浦君。行きましよう。」

三人棒は、福井県鯖江市水落町に向かった。

「此処ですね。石丸さんの友人の家は。」

「前まえ式しき肇ちか彦ひこさんですか？」

「はい、そうですか。」

第二話 五年前の犯人 part 1 (後書き)

今回は、パート2です。アリバイ崩しまで話が展開するが・・・

第二話 五年前の犯人 part 2 (前書き)

アリバイがくずせれるのか・・・それとも別の犯人が・・・短めです。

第二話 五年前の犯人 part 2

「はい、そうですが。」

「難事件解決探偵事務所の亜羽地と申します。」

「同じく吉米です。」

「同じく海浦です。」

「探偵さん達が何の用で。」

「実は、こういふことで。」

亜羽地は、前式に事件のことを話した。

しかし、前式は、犯行を否定していた。

探偵事務所に戻る前に、もう一回事件現場に足を運んだ亜羽地達。

「僕としたことが、こんな証拠があることに気がつきませんでした。」

海浦と吉米は、その証拠を見ていた。

「ということは、親友はシロ。失踪者がクロ。」

「そういふことになりますね。」

第二話 五年前の犯人 part 2 (後書き)

次回は、 part 3 になります。

第二話 五年前の犯人 part 3 (前書き)

犯人は五年前の失踪者となった。

第二話 五年前の犯人 part 3

「前式さんの証言によると、石丸さんとの縁を5年2か月前に切った時以来連絡がなかったそうです。」

山風がそう言った。

「千羽鶴さんを殺したのが石丸さんになるなんてどう見ても変ですよね。」

亜羽地はもう一つ確かめたいと言って、事件現場に戻り始めた。

一方事件現場では……

「もう一本もらおうかな。」

石丸がいた。其処に三人棒が現れた。

「石丸さんですか？」

「はい、私が石丸ですけど？」

亜羽地が言った言葉を聞いた石丸は、少しずついだちを見せて事件の自供をした。

「自分が、千羽鶴さんを殺しました。5年2か月前、親友との縁切れの原因は、彼なんですよ。」

石丸は、5年2か月前の出来事を話した。

吉米は、石丸に言った。

「千羽鶴さんに脅迫されているンなんて信じられません。」

亜羽地は、吉米の言論を止めた。

「確かに、あなたは脅迫されている事実は本当ですが、だからと言って殺人を行うという愚かな行為は、しなくとも親友に誤っていれば良かったはずではありませんか。」

亜羽地の説得力の言葉は、石丸に届いた。

石丸は、一寸木に連行された。

「殺人を犯すより、謝罪で罪を償うのが一番良かったんですよ。」

吉米は、せつない気分だった。

山風は、コーヒートのオーナーをほめていた。

「あれだけ、すごいコーヒートを作ったのに殺されてしまうとは、悲しすぎますよ。」

次回予告

「私は、恐喝はしないわよ。」

「藍多左右木あおたさゆき、前科歴がありますね。」

「今回と同じ、恐喝罪ですね。その前は・・・」

次回 三人棒 第三話 屁理屈過ぎる恐喝犯

「これは、良い戦い相手ですね。」

第二話 五年前の犯人 part 3 (後書き)

次回もまた見てね。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯part1 (前書き)

変な恐喝犯、藍多と三人棒の対決。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 1

藍多は、被害者を脅しまくっていた。

「あと7カ月で、1千万、払わないとあなたの財産すべて私が持つていくの。」

「困ります。そんなにも払えないし。」

「あなたを殺してもいいのよ。」

藍多は、被害者から30万をもらった後、立ち去っている最中、亜羽地と出くわした。

「おっと。」

「あ、すみません。」

「前方不注意で申し訳ない。」

「大丈夫です。こちらこそすみません。」

亜羽地は、藍多が忘れていた1万円札を拾った。

「あれだけのお金は、妙ですね。」

探偵事務所にやってきた亜羽地は、ほかの5人より先にやってきた。

「亜羽地さん、おはようございます。」

最後の一人が午前8時25分ごろに来た。

「ギリギリセーフだな、吉米！」

上間と虹山と海浦は、そそくさと亜羽地のほう向かった。

「遅くなりそうなのは、しょうがないだろ！」

吉米と山風の目から雷と火花が飛び散っていた。

「またはじまってますね。」

海浦は、冷静に亜羽地に話した。

「この一万円札。妙な感じがします。」

上間が一万円札を手に取った。

「なんか、赤い点が付いています。」

「僕には、それが血の跡にしか見えないのです。」

「亜羽地さん、その一万円札。最近噂されている頭脳明晰な恐喝犯の犯行だと思えます。」

虹山が言ったことは、正しかった。

「この探偵事務所に来る前、女性にぶつかりそうになりました。その時一万円札が落ちていました。」

山風は、その女性のことを知っていた。

「バスに乗り込む姿を見ました。おそらく坂井市春江町に住宅があるかも。」

「さっそく、行きましょうか。」

「はい。」

亜羽地と吉米と山風で、坂井市春江町に向かった。

車から降りた亜羽地達は、藍多という苗字のある住宅を探した。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 1 (後書き)

次回 パート2。お楽しみに！いまさらですが、実は三人棒シーズン4になると警視庁で物語が移ります。探偵事務所から特命事件解決係に名前も変わるんです。そこでもしかしたら、二つの特命係がどんな感じで絡むのかをイメージしてほしいのです。ネタばれですが、実はサルウインは、のちに日本もとある国に監視体制におかれます。シーズン6のある物語で元・特命係の亀山がその国から来日します。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 2 (前書き)

結構手ごわい恐喝犯。しかし亜羽地は、事件現場に向かい・・・

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 2

吉米は、藍多という名字を探り当てた。

「ありました！亜羽地さん。」

亜羽地と山風と吉米は、藍多の家に入り込んだ。

亜羽地は、チャイムを鳴らした。

「はい、あのーあなた方は？」

「難事件解決探偵事務所の亜羽地と申します。」「同じく吉米です。」

「同じく山風です。」

亜羽地は、藍多に聞いた。

「ちょっと、お邪魔してもかまいませんか？」

「あー、良いですけど。」

「私が恐喝を行った。」

藍多は、少し怒りながら言った。

「亜羽地さんと吉米の考えなんですが、僕には、それは難しいのではよ。」

山風の言い方は矛盾していたいろんな意味で。

「私は、金を虫探るようなことをしません。ちゃんと調べてから来たってください。私はアライバイのある人間です。恐喝なんてそんな愚かな行為はしませんよ。」

亜羽地達は、事件現場に移動した。

福井県警の一寸木と遭遇した。

「これは探偵さん達ですか。」

「何か見つかりましたか。」

「被害者は、暴行を受けただけで傷害と恐喝で捜査しています。」

「そうですか。」

亜羽地は、藍多の触りそうなものを見つけた。

「貯金箱ですね。一寸木さん此の貯金箱の指紋は取りました。」

「鑑識がとっていたので、分かると考えられます。」

山風は、ごみ箱からグチャグチャになった紙を見つけた。

「何だろうこれ？」

山風は、紙を広げた。

「全額、払わないならマジで殺す。」と書かれていた。

「一寸木さん、こんなを見つけました。」

「あれ、鑑識の一人がごみ箱をあさっていたのに、こんなのが良く見つかりましたね。」

亜羽地と吉米は、鑑識の見落としがあることを知り、くまなく捜査した。

「何でしょうか。この宝石の欠片は。」

「藍多の家にあった宝石が此処にあるのは、なぜなのでしょう。」

一寸木の携帯に電話がかかってきた。

「失礼。電話しに行ってきます。」

一寸木は、驚くべき真実を知った。

「指紋の人物が分かった。」

鑑識の一人は、次のように一寸木に話した。

「はい、それが藍多左右木というじんぶつなんやっつて。前科ありです。」

「分かりました。探偵たちが先ほど来ましたので、彼らにも報告をします。」

一寸木は、電話を切った。

「よしっ！」

一寸木は、ガッツポーズを付けた後、亜羽地達のところに戻った。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 2 (後書き)

次回 part 3。お楽しみに！

三人棒の豆知識コーナー

亜羽地です。今回は、我々が設立させた難事件解決探偵事務所のメンバーについて報告します。

亜羽地^{あはじ}眺彦、1961年12月22日に誕生。短大卒業した後、国家試験でキャリア組となる。警部補として活動していた。ものすごい速さで事件解決するため、警察内では、あだ名で「妖怪刑事」と呼ばれている。しかし、福井県警察本部に異動後、12年前の事件をきっかけに意思による休職をした。

そのあと、探偵事務所を作った。内村刑事部長は、亜羽地の探偵期間を休職中であったが、誇り高い研修ということで、シーズン4にて階級を1ランク上げた。つまり警部に。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 3 (前書き)

藍多の屁理屈な言動について亜羽地がキレる。

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 3

一寸木は、亜羽地に言った。

「亜羽地さん、藍多左右木という人物に、前科がありました。」

「僕は既に、その藍多という人物に会っています。その時に落とした一万円札です。右上の所赤い点が付いていて、血だと思いました。被害者は暴行を受けたが飛び散った血がまさか一万円札の一部にかかっていることに気がつかないなんて、一寸木さんならどう思いますか？」

「よっぽど、素人並みの恐喝犯ということになりますね。というより自分はしませんから。今後一生、善意ある行動をとっていただけですけど。」

「前科歴は、すべて恐喝ですよ。一部には、暴行による傷害で懲役がかさんでいるものもありました。しかし、恐喝で奪ったお金には、血がつかない所に置いていた。」

「藍多のミスということですか。」

「そういうことです。吉米君と山風君行きましょう。」

「よし、これで真実を聞かせてもらっせ。」

亜羽地達は、藍多の家にやってきた。

「だから言っているでしょ！29万円は、ATMを使用して出した

んです。」

亜羽地が一つ指摘した。

「あそこのATMは、5万円以上は、取り出す際は、郵便局員に話しておかないといけないのです。そういう手続きがないといけません。」

藍多は、こう言った。

「ちゃんと、手続きしました。」

「あれ、29万円って中途半端な値打ちですね。本来なら30万円と言つと手続きに不安定さがなくなりますよね。29万円を取り出すとしたら、郵便局員のほうが少し困ってしまうかもしれません。だって中途半端すぎますからね。」

藍多は、苛立っていった。

「1万円札を落としていたんです。恐喝なんて一度や二度じゃありませんから。どうでもいいのですよ。」

亜羽地が激怒をし始めた。

「何を言っているんですか！どうでもよくないことだってありますよ！もう少し、謙虚になりなさい！」

藍多は、恐喝と傷害と強盗の罪で、福井県警の2人に連行された。

「これで本人も凝りますよね。」

「そう願わなくてはなりません。これ以上、罪を犯さないためにも。」

一方、福井県警では・・・

「そろそろ、あの探偵にも犯人逮捕の権限ぐらいは、あげてもいいかもしれない。」

「しかし、無謀という可能性もありますよ。」

「大丈夫だ。亜羽地は、此の警察にもいた妖怪刑事であり、素晴らしい行動をとってくださった方だ。そいつに部下ができるなんて物凄く我々も助かることだし。取調室を使わせてもいい。」

「では、2ヶ月後にその通知を出します。」

「いや、明日にしたほうがいい。そのほうが効率いいだろ。」

「なるほど、承知しました。」

本部長、二信武岳にじたけだすと警務部部長、雀崎晶司すずめあきしよすじは、会話した後、雀崎が去っていくところを二信は見ていた。

次回予告

「一件目、痴漢をした男性を山風が捕まえた。罪名、痴漢と公務執行妨害の容疑で現行犯逮捕。」

「二件目、吉米が温泉上がりに一服していたところに、覚せい剤の

引き渡しをしているところを見つけて捕まえた。罪名、覚せい剤所持と公務執行妨害2人とも。」

「三件目、虹山が窃盗の前科を持つ女を捕まえた。罪名、窃盗と公務執行妨害。」

「最後は、上間が空き巣をしようとしていた男性を捕まえる。罪名、窃盗未遂と公務執行妨害。」

「四件とも、公務執行妨害というのは、不思議ですね。」

「確かに、犯人の親玉がいそうな気がしますね。」

「親玉は、殺人を犯している可能性がありますね。」

三人棒 season 1 第四話 連結の事件

「普通に、考えても見えないことだってありますから。」

「確かにね。」

第三話 屁理屈すぎる恐喝犯 part 3 (後書き)

次回もみてね。

三人棒の豆知識コーナー

吉米滝広、1982年11月7日に誕生。石川県立大学卒業。そのあとは、フリーターとして活動していた。熱血漢の強いほうであり、亀山とは、違い事件に巻き込まれにくいタイプである。警察官となった時の彼は、巡査部長になっている。その前に彼女がいたが、いつ頃であったかは不明。

第四話 連結の事件 part 1 (前書き)

一件目と二件目と三件目の事件では、まだ確信に至っていないかったのだが・・・

第四話 連結の事件 part 1

一件目の事件・・・

丸岡駅に乗った、山風は、福井駅まで行くことにした。

同時に、女性が乗っていた。

山風は、電車の手すりに寄りかかっていた。

森田駅にその男性が現れた。

福井駅を降りた山風は、不安に思い、女性の後をついて行った。

その男性は、女性に近付いた。

「あの男性、触ったな。よし！」

山風は、その男性に話しかけた。

「探偵の山風ですが、今、女性の腰のあたりを触ったでしょ。」

「なんです、急に触っていませんよ。」

「意図的にしか見えませんでしたけど。」

山風に足払いして、逃げた男性。

「まてー！」

男性は、爆走しながら逃走していた。

山風は、回り道して、男性と鉢合わせになった。

「はい、公務執行妨害と痴漢の二点セットで現行犯逮捕。」

その男性は、のりやまかおき乗山佳緒来、41歳。20歳の時に、麻薬所持の前科を持っている。

二件目……

吉米が、温泉から上がり一服していた。

「ああ、良い気分だ。」

温泉から上がった後、吉米は、不審な行動を目撃した。

「なんだ？確か、あれだよなシャンプーボトルの中に覚醒剤があったという事件が、こいつらはその事件を知らないな。よし、俺もその事件に参加してやろう。」

吉米は、二人に話しかけた。

「あのー探偵なんですけど。」

二人は、とっさに逃げた。

「ちょっと、待ってください。」

二人は、必死に逃げていた。

「待ちなさい！」

一人の警官が一人を止めた。

そして、吉米が最後の一人を捕まえた。

抵抗したこともあつてか、公務執行妨害も入った。

二人の男性の名前の年齢は以下のとおりである。

かみじゆうたん
神路誘博。 32歳。

柳久保三ツ木。やなぎくほみつぎ 28歳。

三件目・・・

虹山が、何かを見ていた。

不審な女性を見つけたことである。

第四話 連結の事件 part 1 (後書き)

次回、part 2をお楽しみに。

三人棒豆知識

山風正晃、1990年8月26日生まれ。冷静な態度をとりながらも、事件に巻き込まれやすい体質の持ち主である。シーズン4では、巡査部長に。

第四話 連結の事件 パート2（前書き）

4件目の事件発生により、事態が急変し始める。

第四話 連結の事件 パート2

三件目の事件・・・

虹山は、不審そつに女性を見ていた。

巡回していた警官を一人捕まえた。

「ちよつと協力いただけますか？」

「はい、あの女性。不審情報が多発していて困っているらしいんです。」

「そうですね。」

虹山がいたのは、福井市鮎川町にいたのである。

その女性は、住居に主の許可なく入った。

警官と一緒に虹山は、その女性を見つけた。

「ちよつと何しているんですか！」

虹山の声に女性は驚いた。

そして、逃走した。

警官が取り押さえようとしたが柔道の技で潜り抜けた。

しかし、挟み撃ちに遭い、女性は虹山につかまった。

「よし、不法侵入および公務執行妨害で現行犯逮捕！」

警官は虹山に向かってお辞儀をした。

虹山はそのあとお辞儀した。

その女性の名前は、東上床外茂子^{ひがしうわたけともし}である。

その女性の年齢は、35歳。

三人棒が全員揃った。

4件目の事件が発生したという情報を警察から入手した。

「亜羽地さん、事件発生現場は福井市上森田5丁目ですね。」

「吉米君。何がある場所ですか。」

「確か3か月前にもここで窃盗事件がありました。」

「吉米、3か月前の窃盗事件と今回の窃盗事件はつながりがあるのかよ。」

山風が吉米の事件の関連性を問いかけた。

「これだけでなく、この三件の事件。サークル関係の事件かもしれ

ませんよ。ほら、犯罪研究系のサークルが犯罪を犯した可能性だつてありますから。」

上間は、4件目の事件を調べた。

亜羽地と吉米と山風は、上森田に行くことにした。

一寸木率いる刑事が4人ほどいた。

第四話 連結の事件 パート2（後書き）

次回は、パート3です。お楽しみに！

次回の展開について少しだけばらします。

「やはり、サークル関係の事件でしたね。」

第四話 連結の事件 part 3

亜羽地を嫌う人物、野田操彦^{のだみさひ}巡査部長は、亜羽地を見つけてこう言った。

「亜羽地さん、ここは我々の仕事場です。お引き取り願えませんか。」

「一寸木さん！」

「おい、野田。亜羽地さんは、元・刑事なんだぞ。口を慎め馬鹿者。」

「すみません。」

亜羽地と山風と吉米は、窃盗事件のあった宝石店に向かった。

店長に話した吉米。

「探偵のものです。警察とは別なので、警察に話した通りでいいですから言ってください。」

店長はこう話した。

「店にあった高級腕時計を5点金額にして750万相当を盗まれました。」

亜羽地の携帯に上間からの着信がかかった。

「上間君、どうしましたか。」

「3か月前の事件と今回の四件の事件は、6人のサークルメンバーの犯行という書き込みを見つけましたが、信用できますか？」

「どうもありがとうございます。一応信頼してみても構いません。」

着信を切った亜羽地は、吉米と山風を呼び出した。

「行きますよ。」

「はい。」

山風と吉米は、亜羽地に報告をした。

「どうやら、サークル関係の事件のようですね。」

亜羽地達は、上森田4丁目の方にいた。

そこに事件を起こしたサークルがある。

3人のメンバーしかいない。捕まった者もいるからである。

「警察じゃないだろうな。」

「大丈夫だ。谷古宇！」

谷古宇佃斗、38歳。サークル代表。

南里渡輝、41歳。

福山延岡、ふくやまのぶおが 37歳。3か月前の犯人。

「いい加減、出てきなさい。」

亜羽地は、3人に呼びかけた。

「出ないところちから行くぞ！」

吉米の声に、3人はこっちに来ては困ると思った。

敗北を味わった3人は、出てきたが粘り強く、逃走した。

「山風君、追いかけて。」

「分かりました。亜羽地さん。」

山風は福山を取り押さえた。

「観念したらどうですか。」

「分かった。降参！」

あとの二人は、亜羽地と吉米と警察で挟み撃ちして取り押さえに成功。

山風は、不満げではあったが、結果で安心していった。

次回予告

「息子が犯人です。」

「うさぎさわらび 兎澤里衣、家庭教師ですね。」

「なぜ、兎澤さんが殺されたか難しいですよ。」

「息子が犯人とは決めつけにくいことになるということですか。」

三人棒 シーズン1 第五話 犯人は、息子です

「不自然ですね。この事件。」

第四話 連結の事件 part 3 (後書き)

次回もお楽しみに！

第五話 犯人は、息子です part 1

警察と探偵は、ある一軒の家を捜査していた。

「亜羽地さん、いつもいいところに来ますね。」

一寸木は、嬉しそうに話した。

「これでも3分遅刻です。」

「まっ、ある程度の遅刻は付き物ですから。」

「被害者の身元、分かりますか。」

吉米がそう話した。

「被害者は、兎澤里衣。32歳で家庭教師をなされていました。」

野田がまた現れた。

「亜羽地元・刑事殿、十分な情報を集めたらお引き取り願えますか。」

「野田巡査部長、少し下がってる!」

「うるせえーな、米君。」

「何だと!」

「ホシは、捕まえたと聞きましたが。」

亜羽地は、屯戸警部補に聞いた。

「取調室のほうにいます。」

亜羽地達は、取調室の方に移動した。

「探偵の亜羽地と申します。」

「同じく、吉米と山風と申します。」

ホシは、三人を見つめていた。

「君の名前、教えてもらえますか？」

「僕は、日出寛次ひつとまひつと言います。今回のことは申し訳ございませんでした。」

亜羽地と吉米は、山風に後を頼んだ。

「亜羽地さんどうしたのですか。」

「あの少年を見ていたらこれは少年が人を殺したのではないと判断しました。」

「えっ？」

吉米は、左に首をかしげた。

「どづいつことだろづ。亜羽地さんどこへ？」

「探偵事務所に戻り、上間君と海浦君と組みます。」

「そうですか。じゃ俺は、山風のところに戻ります。」

「分かりました。」

亜羽地は、上間と海浦とともに事件現場にいた主婦に話をしに行った。

第五話 犯人は、息子です part 1 (後書き)

次回 part 2。お楽しみに！

第五話 犯人は、息子です part 2

亜羽地と上間と海浦は、事件現場にいた主婦に会いに行った。

主婦の名前は、日出主実である。

「子供が家庭教師を殺したのですよ。なにがおかしいというのですか。」

夫の日出茹晶規は、亜羽地達に罵声を浴びせた。

「さっさと帰ってください。訴えることになりますよ。」

亜羽地達は、福井県警の鑑識の所に行った。

「指紋の結果はどうですか。」

亜羽地が、鑑識の一人に問いかけた。

「それがですね、子供の指紋ではなく、親の指紋が出たのですよ。」

「と言いますと。」

「父親の、指紋だと思われます。日出茹晶規は、ずっと前、大学で女子大生2人を川に投げ捨てるという暴力行為で逮捕された前がありました。」

海浦は少し疑問に思った。

「女子大生の中に兔澤って書いてありますよ被害者のリストに。」

「ほんとうですね。怨恨による犯行でしょうか？」

「これは、何でしょうか。」

「がいしゃの身元から出てきた物です。」

「なるほど、これですべてが解けそうです。」

第五話 犯人は、息子ですpart2（後書き）

次回 part3。お楽しみに！

第五話 犯人は、息子です part 3

亜羽地達は、息子と一緒にいた。

7人で事件現場に行くと同時に真実を明かすことにした。

そのあとを一台のパトカーがゆっくりと尾行していた。

「一寸木、良いんですか。」

「野田、俺は亜羽地のことを知っている。」

「どんなふうにですか？」

「昔、刑事だったんだ。亜羽地は何らかの理由で退職しているらしい。」

「でも今探偵しているって違法ですよね。」

「だが、許されている観点があるらしいがそれ以上言えない。」

「詳しいことが分かりませんね。」

亜羽地達は、日出の家に着いた。

「無実証明となり、釈放決定になりました。」

夫は、亜羽地に言った。

「息子が犯人だと言っているのに釈放とはどういうことだ！」

吉米は怒りを日出の夫に言った。

「どれだけ息子を犯人すれば気が済むのですか！無実証明とあなたが犯人という真実が明かされましたよ！」

「俺が犯人、馬鹿を言え！」

山風は指紋の紙を見せて告げた。

「あなたの家の鈍器に息子のではない指紋が見つかりました。もしかしたらあなたの指紋と照らし合わせれば合うのかもしれない。」

日出の夫は、兎澤のことを言った。

「あいつにこう言われたんだよ。」

回想開始

「息子さんにあなたが私にやったことと言ってあげてもいいのよ。」

「もう過ぎたことだろ！俺は反省もした。」

「そんなんじゃないのよ。真実って明かすべきよね。」

回想終了

「むかついた揚句、鈍器を持って彼女の頭を殴りました。」

亜羽地は、息子を犯人にした理由を聞いた。

「あなたはなぜ、息子を犯人したのですか。」

「俺と同じ運命にしてやりたかった。ただそれだけです。」

「人の運命をめちゃくちやにするような人は良くありません！」

亜羽地は日出の夫に激怒した。

そのあと、日出の夫は一寸木の持っている手錠に捕まり、御用となつた。

アイヴィス共和国の船が日本にやってきた。

いったい何が始まるのか？

次回予告

日本はアイヴィス共和国の監視下決定。

その衝撃の真実とは……

「アイヴィス共和国の教師が国会議員に殺害された。」

「福井県で起きたことです。時期は半年前。」

「亜羽地さん、此の真実でアイヴィス共和国が飛んでくるのでは。」

「もうすでに捜査官によって始まるつとじています。」

三人棒 season 1 第六話 日本監視領域確定

「流石に、事件解決が我々では難しくなりましたね。」

「確かに。」

第五話 犯人は、息子です part 3 (後書き)

次回もお楽しみに！

第六話 日本監視領域確定 part 1

半年前、丸岡町龍ヶ鼻ダムの近く。

一人の人が山で、死体を捨てていた。

その者は国会議員である春潮楼大實しゅんせうろうだいみで二年生議員であった。

「馬鹿野郎、日本の国会をなめている奴はこうなるんだよ。」

半年後・・・

山菜取りに行った60代男性がその死体を見つけて警察に連絡した。

「がいしゃの身元は・・・」

「珍しい名前ですね。完九和さだこかず。英語の教師でアイヴィス共和国から来た人です。」

「ちょっと待て、アイヴィス共和国って言わなかったか？」

「言いましたけど何か？」

「まずいな、日本はただでさえあの国に狙われているのに。」

「探偵にも報告しますか？」

「亜羽地さんにも此の事を話したいから県警に先回りしてくれと言ってくれ。」

「了解しました。」

亜羽地達は、県警に先回りしていた。

「一寸木さんですか。」

「報告したいことがあるのでとりあえず一課に。」

少し急ぐ形で歩く4人。

しかし、此の事件をアイヴィス共和国連邦警視庁に連絡している人がいた。

埜口重宣やぐちおもいのぶた太巡査部長であった。実は彼はアイヴィス共和国の警察官でもあるため、スパイに近い活動をしていた。

アイヴィス共和国連邦警視庁

刑事部スパイシフト一課課長、幡畑彦警視のぼりはたひこは、埜口重の連絡を聞いた。

「分かった。此の事を刑事部長にお伝えしとく。君はその場で待機してくれ。」

「了解。」

幡は行動が早かった。

これがのちに日本の未来を左右するきつかけとなった。

亜羽地達は、話し合っていた。

「間違いなく、日本はアイヴィス共和国の手の中に収められる可能性が出てきますね。」

「そうになると、良いこともあるのか。」

「悪いこととしては、プライドが傷をつけられることだけです。」

「もはや、此の謎は我々では解けそうにもないですね。」

第六話 日本監視領域確定 part 1 (後書き)

次回 part 2 に続きます。

アイヴィス共和国の情勢が少しずつ明らかにされます。とんでもない力を持つあの架空の国。一体この先どうなるのが気になります。

第六話 日本監視領域確定 part 2

亜羽地は、今回ばかりは少し降参気味であった。

吉米と海浦は疑問視していた。

「どうして、亜羽地さんがこれほどまでに負けた感触に触れているのだろう?」

「相手がアイヴィス共和国だからじゃないのか。」

「どづいうことだい?山風。」

「要するに、アイヴィス共和国連邦警視庁という日本よりもでかい警察組織があることだよ。すなわち我々の出番はないということだよ。」

「でも、このままだと日本の運命はどうなるの?」

「さあーな。」

アイヴィス共和国の警察団体が、日本にやってきてしまった。

第六話 日本監視領域確定 part 2 (後書き)

次回は part 3 で少し長くなります。

第六話 日本監視領域確定 part 3

アイヴィス共和国の警察団体、国際捜査一課の者たち合計1520人がやってきたのである。

芹沢と伊丹が彼等を見ていた。

「なんですか、あの大人数。」

「ついにおいでなさったか。アイヴィス共和国という国の国際捜査一課の者らしい。」

「先輩それって・・・」「日本が落ちたということになる。」「マジですか!」

国際捜査一課課長、ウィル・ケムラは刑事部長と話し合っていた。

「頭の高い日本をきちんと正すのは、アイヴィス共和国の役目。アイヴィス共和国人の殺人事件は、我々が捜査します。」

「しかし、日本国内で起きた事件だ。裁くなら日本で裁かなければいかんだろう。」

「そこが頭が高いと言っているんです。此処は我々に任してください。」

国際捜査一課は全国に散らばった。宮城県、東京都、神奈川県、北海道、福岡県、鹿児島県などそして福井県にもやってきた。

亜羽地と吉米と山風は、春潮楼大實県議会議員に話しかけていた。

「このままでは、貴方はアイヴィス共和国の警察官に身柄を拘束されます。」

「日本の警察に自首を申し立てていた方が安全なのですか。大変、申し訳ないことをしたと思っています。」

「殺すつもりではなくとも、アイヴィス共和国には日本がマークされているという自覚がないため、このような事件が起きると大騒ぎになっています。」

亜羽地と春潮楼一行は、県警に言った。

「亜羽地さん、来てはいけません。」

一寸木が突然、亜羽地達の所に来た。

「さつき、アイヴィス共和国の国際捜査一課の方々がやってきて、資料を漁りに来たんですよ。いつ戻ってくるかわからないです。」

春潮楼が一寸木に言った。

「私がアイヴィス共和国の人だと知らずに殺してしまいました。」

自首した後、アイヴィス共和国に身柄を引き渡された。

日本は失態を起こしたことは、全世界に衝撃をかけた。

アイヴィス共和国の副大統領は、会見で日本国は、アイヴィス共和

国監視国家に入るということになった。

「ついに入ってしまったね。」

「吉米君、今後は不味いことになりそうな気がします。」

「確かに、そんな暗いことを考えては食欲失くしますから。少しハッピーになりましょうよ。近くのラーメン屋さんにもよって醤油でも。」

「自分は、味噌ですけど。」

「亜羽地さん、味噌ラーメンがお好きですか。」

「吉米君が、醤油ラーメンが好きというのが驚きましたけど。」

「見た目で、塩ラーメンが好きそうな人ってよく言われています。」

次回予告

「家族の2人が失踪している事件。」

「担当者が一寸木だけど手こずっているから、助けてくれという。」

「犯人構造図がパズルですね。」

「これは分からなくなるわけだ。」

「しかし、犯人は一人を殺した直後、謎の人物にさらわれています。」

「

「そいつも気になりますが・・・」

「入り乱れた事件となりそうですね。」

三人棒 season 1 第七話 ホームパーティ

「ヒントさえ見つければ、楽勝なんだけど・・・」

第六話 日本監視領域確定 part 3 (後書き)

次回もお楽しみに

次回の登場人物

かんへがわなと

神戸川名執、33歳。被害者

かんへがわゆうじか

神戸川夕近、30歳。失踪者

かんへがわさとちか

神戸川郷知香、31歳。被害者の妻・失踪者

かんへがわたくま

神戸川拓舞、7歳。被害者の子供

ほんなへだすがみち

本鍋田清道、46歳。被害者の家のお隣さん

さえぎじゆんじゆうつ

叫潤次郎、33歳。失踪・殺人の犯人

あきなしゆうよ

春夏冬優代、31歳。郷知香の友人。

よしむらしずひで

吉村靖出、30歳。被害者の同僚。

きんづきもりや

如月森家、39歳。犬と散歩中に被害者の遺体を目撃した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4378p/>

三人棒～難事件解決探偵事務所～season 1

2011年11月9日18時18分発行